

靈山寺での会合は結果的には失敗に終わり、参加者はそれぞれ別行動をとったわけであるが、この後に探索の網にかかりこの計画が明るみに出たわけである。この結果がどうなったのかは、明治四年六月二十八日、「今般豊後三郡之内村々、日田県管轄被仰付、今日郷村引渡^二付、右孝堂儀も其儘日田県^一引渡申候」とあり、廃藩置県により日田県へ管轄が移った為、不明のままとなっている。

ちなみに、孝堂等の申立と共に提出された寒田村西福寺探索の際の覚書には次のようにある。

覚

一、小銃 拾四挺

内拾式挺

ライフル

式挺

ケハール

一、胴乱

拾四

一、刀

四腰

右之通、寒田村西福寺方取揚置申候、以上、

辛未三月十五日

延岡藩

なお、この小稿で扱った史料は、『宮崎県史料・史料編・近世2』所収の内藤家文書によるものである。

《参考・引用文献》

『宮崎県の百年』別府俊統他著、山川出版社 一九九二

『大分県史・近代篇1』大分県、昭和五九年

『大分の歴史8』富来隆執筆、大分合同新聞社、昭和五三年

(別府大学付属図書館司書)

華北交通寮と別大キャンパス

後藤 重巳

明治三十七年(一九〇四)二月に
始まった日露戦争で勝利を得た日本

(は、帝政ロシアの東清支線(大連・

長春間、奉天・安東間)を接収し

て、三十九年十一月に「南滿州鐵道

会社」(略称・満鉄)を設立した。

当初、この会社は、日中合弁会社

として開設されることになっていた

が、結局、日本単独の半官半民の組

織となり、日本民族会社の性格を強

く持ち、以降の日中競争期をおし

て、日本の対大陸国策遂行に大きく

関わることになった。

「満鉄」は、鉄道事業ばかりでな

く、満州における日本の国策機関と

して、鞍山製鉄所設立の投資活動等

も行い、全産業分野の活動拠点とな

り、自らも諸種多数の關係会社を経

営して行き、昭和十二年(一九三七)

には、全額出資の会社は十五社、関

連会社は七十五社を数えるまでに巨
大化した。

十二年七月、日中戦争勃発後、満

鉄は、日本軍の指令によって、占領

下、河北諸鐵道の損壊復旧にあたっ

たものの、占領地域が拡大したため

陸上・運河・港湾に関わる交通事業

を総括的に統制運営するための組織

の結成が急務となってきた。

そこで、昭和十四年四月、資本金

四億円を満鉄・北支那開發会社・中

國臨時政府が出資する日華合弁で中

國特殊法人の「華北交通株式會社」

が北京に設立されることになった。

正式会社名は「華北交通股份有限

公司」と称された。

『華北交通株式會社史』によると

鐵道の經營路線は、北寧・京漢・津

浦・平綏・膠濟などの従来の路線に

日中戦争後に敷設された北京―古北

口（京古線）などを架設、昭和十八年現在で、路線距離六一七七キロ、車両数は機関車・客車各二三〇両、貨車一八〇〇台を有し、水運営業距離は四二二三キロ、所有自動車は一万六千台を数えるに至ったと云われる。

開設時の「総裁」は宇佐美寛爾で、従業員十五万人、うち満鉄及び鉄道省などからの派遣・直接採用の者を含め日本人四万二千人の他は、中国人であった。（『華北交通外史』など）。

同社は、昭和十五年四月、伝染病・風土病の予防と一般衛生指導に当たるため、北京西郊外に保健科学研究所を開設したが、鉄道事業の特性や北支治安事情などから従業員の中に外傷者が少なくなかった。このため、患者のリハビリに最適な温泉療養を必要とする者には、満鉄の別府療養所（鶴見園）に療養を委託していた。

しかし、患者の数が次第に増加す

るにつれて、会社が直轄する療養所の開設の必要に迫られ、検討の結果、満鉄が大分県別府鉄輪石垣村に所有する温泉付きの土地一万坪を譲り受け、保養施設の工事に着手した。昭和十六年のことであった。

建設工事は、間組が請負い、開設に必要な資金は、華北交通社員の共済基金から支出、翌十七年、五十人収容の「別府温泉療養所」が完成、初代所長には、張家口鐵路医院事務長の山田民藏氏が就任した。

満鉄は、昭和二十年の終戦直前に結ばれたヤルタ協定によって、中国・ソ連合弁で運営されたが、二十七年に中国に返還された。華北交通も終戦処理の過程で同様の処理がなされた。

明治四十一年四月に創立された大分市の私立豊州女学校は、昭和期に入り、昭和実践女学校などと校名を代えながら、昭和十七年に財団法人豊州高等女学校に改められ、終戦を迎えた。昭和二十一年十一月、日本

温泉療養所」であった。

国新憲法、二十二年三月、教育基本

法・学校教育法が公布され、新教育の時代が開幕した。これより前、豊

州高等女学校には、「専門部」が併設されていたが、佐藤義詮理事長は終戦と同時に、この専門部を独立し

た学校にする夢を抱いていた。彼は

新校地を、戦火から逃れた別府の地に求め、同時に校名の変更も考え、

財団法人豊州高等女学校のなかに、

「別府女子専門学校」（正式には別府女学院）併設計画を図り、鶴見園

の借用によって施設を確保、二十一年五月一日、待望の開学を成就した。

この女子専門学校は、社会・国文・英文の三学科で構成されていた。

ところが、開学早々二週間目、校

地・校舎であった鶴見園は、戦時財産として、接収されることになり、

代替校舎に「満鉄別府保養所」が貸与されたものの、これも再び接収さ

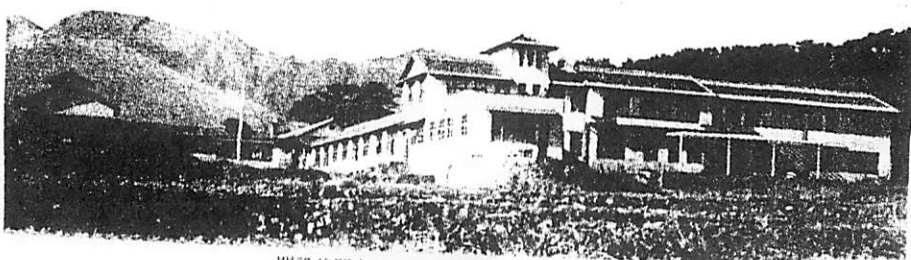
れ、最終的な移転先として決定したのが、今日の校地「別府市大字北石

垣円通寺八十二番地、華北交通別府

移転当時の様子について、故首藤

基教授は次の如く記している。

開校当時の別府女専は、進駐軍の



開設後間もない頃の校舎全景（昭和22年頃）

隊長の好意で、現在の位置に建って

いた華北交通の療養所の建物を譲り

受けたが、室にはまだ病人がいて、

実際に使用できる室は、小さな八畳

の室が唯一という有様だった。新入

生は、二百人にも近く、まるで問題

にならなかつた。幸いなことに、校

門から玄関までの間を埋める森は、

深く美しかつた。その森の中で、夏

の日影をさけて何度講義をしたこと

か。雨が降れば生徒は廊下や階段を

利用して、机もなくいく時間も講義

に耳を傾けたものだ。―以下略―

『佐藤学園の八十年』より)

この表現には、やや懐古的・感傷

的な面もあるが、施設は個室が多

く、数十人の学生を収容し得る実質

的な教室は二、三に過ぎなかつた。

したがって、一部の学生は、六勝

園通りの宝蓮寺の本堂を借りての授

別府女子専門学校」となり、翌二十

三年の学制改革に基づき、法人母体

の豊州高等女学校を、大分女子高等

学校に編成替え、三十五年の別府女

子大学の設置に発展していくのであ

る。この女子大の設置により、女子

高等学校は別府市北石垣に移転、男

女共学の付属高校となり、校名は「

自由ヶ丘高等学校」と変更された。

移転当初の二十一年十月に発行さ

れた文芸誌「あかのみあ」に掲載さ

れる「萩人」の筆になる「新生別府

女学院」には、

別大電鉄聖人ヶ浜下車、西へ約十

分上ると、和洋の調和のよくとれ

た瀟洒な建物を見出す。

豊の山、豊の海、豊の野、このあ

たりはまだ昔の別府情緒が残って

いる。絵葉書に取り囲まれた様な

である。

付属高校の移転に伴い、高校職員

室・教室などの新設増設も必要にな

つたものの、資金的面から新築建物

はとうてい不可能。そこで各地の学

校校舎・病院病舎解体廃材料を入手

しての施設拡充がはじめられた。大

学施設では、ほんの一部に「鉄筋コ

ンクリート」の校舎が建ち始めたが、

かつての保養所の施設はしばらくそ

のまま活用された。

当時のキャンパスは、自然石組の

門柱に「別府女子大学」の門標がは

は、雨漏りがひどく、雨の日の教室

・廊下は傘が必要な程であった。し

たがって、廊下の敷板の痛みもひど

く、新任の女性教員がハイヒールの

踵を廊下の床に踏み込んで、ひっく

り返る騒動なども珍しくはなかつた。

心配した守衛さんが、蒲鉾板で補修

したものの今度はその板に躓いて転

ぶあわて者もあつた。

そうした歴史的な建物も、国民所

得増計画画期に入った昭和三十六年

前後から姿を消し始めた。

この別府北石垣での搖籃期の詳し

い様子については、資料的制約から

明らかにしえない。当時の関係者

も、ほぼ物故され、数枚の俯瞰写真

に在りし日の面影を偲ばせるのみで

ある。市内鉄輪本坊主地獄の上に所

在する大野保治氏経営の茶園の片隅

に、昭和二十年代後半に建てられた

旧校舎の内の一棟が、製茶工場の建

物として移築され、懐かしい姿を保

ち続けていることを付記しておく。

(文学部教授)